

本事例の関係者

宇都宮大学農学部教員  
異業種交流会  
「大田原研進クラブ」  
大田原市商工観光課  
大田原商工会議所

文部科学省産学官連携  
コーディネーター

国産唐辛子栽培拡大への挑戦

【要約】

那須与一の出身地として知られる大田原市は、かつては唐辛子国内生産の8割を占める一大産地であった。コーディネーターはこの地域の歴史と資源に注目して、大田原市での国産唐辛子栽培拡大のために地域の企業と活動を開始した。

活動を進める中で、栽培拡大に対する本当の課題(ネック)が、実は栽培の技術ではなく、厳冬期に手作業で行う農家のもぎ取り作業であることがわかった。

この課題の解決を目的として、地域のものづくり企業グループを中心とした産学官の連携による研究会を立ち上げ、農家のもぎ取り作業の肉体的負荷軽減と作業の効率化を目標に「唐辛子もぎ取り機開発」の支援を行っている。

【きっかけ】

●投げられた本当の課題

農家との会話の中から、唐辛子を収穫した後、1、2月の厳冬期に手作業で行っているもぎ取りが大変辛い作業であり、そのことが唐辛子の栽培面積を左右している。もぎ取り作業の改善が必要だという本当の課題が投げられた。

●偶然の縁

コーディネーターは平成20年7月、宇都宮大学と小山高専への支援が新規に開始されたが、宇都宮大学における最初の研究室訪問活動で、後に「唐辛子もぎ取り機開発」の研究会に参画して頂く事になった農学部N先生にお会いした。N先生は「食」特にスローフードに強い関心を持っている農業機械の専門家であった。

【段取り・プロセス】

●異業種交流会への投げかけ

大田原商工会議所には、ものづくり企業11社による異業種交流会「大田原研進クラブ」があり、ちょうど平成20年度の活動テーマを検討している時期に、この「唐辛子もぎ取り機開発」のテーマを提案して合意を得た。

●ライバル地域の視察

異業種交流会に属する企業数社が、唐辛子栽培のライバル地域でもある島根県の現地視察を行って島根県の栽培地域と交流し、大田原市における「唐辛子もぎ取り機開発」の方向を決定した。

●地域が幅広く連携した研究会発足

大田原商工会議所は、元々唐辛子を地域の観光資源として取り上げて活動をして来たが、今回は新たにものづくり異業種交流会の企業が加わり、学の側からはN先生が参画することになった。研究会の名称には大田原市特産の品種名を付けて「栃木三鷹普及研究会」とした。

【成果・結果や活動後の変化】

●地域で初めての、異分野企業間の連携

国産唐辛子栽培拡大のテーマで、ものづくり企業・食品加工販売企業・唐辛子生産農家という、今までにない組み合わせで企業間の連携活動が始まった。

●走りながら、現場で考える

開発を具体的に進めるために早々に1号機を試作した。ものづくり企業が農家の作業現場にその試作機を持込んで意見を直に聞き、「コンパクト・シンプル・セイフティ・ローコスト」をコンセプトに、次の試作2号機の検討を行っている。



国産唐辛子  
大田原産栃木三鷹

研究に至る流れ

- H19年7月  
異業種交流会「研  
進クラブ」と交流
- H20年8月  
もぎ取り機提案
- H20年10月  
研究会発足
- H20年12月  
1号機試作

## 成功の事例

### 継続は力、足を運び組織を繋ぐ

#### ●とにかく出前技術相談は続けていた

コーディネーターがこれまで支援をしていた大田原市に、平成18年10月産学官連携推進委員会が誕生した。コーディネーターはその後も毎月一度、県北大田原市まで出向いて出前技術相談会を実施していたが、良いテーマの相談は多くはなく、いささか焦りを感じていた。

しかし、とにかく続けて来たことによって地域とのネットワークができ、その中から今回のテーマが浮かび上がった。継続することの大切さを改めて実感した。

#### ●地域の組織間の連携を取る

大田原市と大田原商工会議所は、唐辛子を大田原市の観光資源と位置づけて様々な商品開発やイベントを支援し、唐辛子の郷大田原のPRを行っていた。しかしこれらの活動も胸突き八丁の状態、何かもう一つブレイクスルーが必要な状況に置かれていた。

コーディネーターは、所謂よそ者・第三者の視点から、この地域では今までになかった異業種・広範囲の連携体を提案し、さらに大学の専門の教員を加えることで研究会の立ち上げを支援した。

## 地域との連携



定例研究会の様子

## 失敗の事例

### 地域文化に対する認識が希薄であった

#### ●課題探求が不十分のまま、先入観を持ってしまった

コーディネーターが大田原市の産学官連携活動の支援を始めた頃、かつては日本有数の唐辛子産地であったことを度々耳にした。市としても唐辛子の郷大田原としてPRを行っていることも知っていた。しかし、コーディネーターとして、その国産唐辛子栽培拡大における課題の探求が不十分であったため、本当の課題にたどり着くまでに約2年もかかってしまった。

また、大田原市には唐辛子を海外から輸入して加工・販売を行っている有力な企業が存在していたため、コーディネーターが唐辛子による新たな事業創出の可能性は少ないと先入観を持ってしまった。

#### ●唐辛子は文化という視点を見失っていた

辺り一面が唐辛子の赤色に染まる原風景も含めて唐辛子は大田原市の文化であり、文化としても栽培を続けなければならない特産品であるという地域の人々の熱き想いの理解が、コーディネーターとして浅かった。

### 成功と失敗の 分かれ道

地域にはその地域の歴史と文化がある。それらを尊重しながら提案と支援活動を行うことが大切である。

## 産学官連携の新たな展開に向けた提言

### コーディネーターは自己啓発が必要

#### ●まだ始まったばかりの段階

国産唐辛子の栽培拡大を目指す大田原市での活動はまだ始まったばかり。まず最初のテーマとして唐辛子もぎ取り機の開発に着手した段階である。

幅広い組織と人々が連携した今回の取組みに対して、コーディネーターとしては、地域の人々が主体的に考えて目的に向かってやり続けられるように、付かず離れずのスタイルで支援をして行きたいと考えている。

#### ●本質を見極める目利き力

多忙を理由に、相談をされるまま、物事を皮相的に受け止める傾向に陥りがちになっている。コーディネーターには常に相談や課題の本質を見極める力が求められるので、忙しい中であっても自己啓発・自己研修の機会を作り、自己の能力伸長に努めなければならないと考えている。

### ☆コーディネーターの一言

2年も掛かったが、根気よく支援を継続してきたことで地域との一体感が生まれ、取組みが大きく動き始めた。